

tt

; tsuba.times



壁から始まる暮らしの再発見

「壁」という風景 2025

1

February 2026





01

自然の壁

地形が語る、最初の壁

滝、崖、雪の壁、紅葉に覆われた山肌。自然の中には、人間が名づけるよりずっと前から「壁」が存在していた。それは動物たちの行く手を阻む障壁であると同時に、雨水が伝い、苔が張りつき、沢蟹が道を見出す生態系の起点でもある。日本人はどんなに細い滝にも美を見出し、海の向こうでは巨大な瀑布に自然の畏怖を重ねてきた。

人間の営みが始まる以前から風景の一部であった壁——その最初の姿を、ここから見ていく。

撮影地_河口湖もみじ回廊 所在地_山梨県南都留郡



撮影地_河口湖もみじ回廊 所在地_山梨県河口湖町

自然が育てた天然の壁

人間が現れるよりはるか前から、大地には垂直の面が存在していた。動物たちはその壁を避けて獣道をつくり、人間はトンネルや橋で越えた。一方、雨水は壁に沿って流れ落ちる。その流れは一滴の雨滴であって数万年続くと、岩は削れ、壁はやがて谷へと変わる。壁を伝った水はやがて沢になり、川になり、人里に届く。それは田を潤す恵みにもなれば、堤を越える災害にもなる。どちらも出発点は同じ、壁を伝った水だ。

ちはやぶる 神代もきかず 竜田川からくれなゐに 水くくるとは

在原業平がここで見ているのは、山肌に張りついていた紅葉が雨風で落ち、川面を紅く染めた景色だ。壁についていたものが水に乗って流れていく。

滝の音は絶えて久しくなりぬれど 名こそ流れて なほ聞こえけれ

藤原公任が詠んだのは、水が涸れた後の滝の壁だ。水はなくなったのに、その岩壁はまだ「滝」と呼ばれている。壁が記憶の入れ物になっている。

日本では細い滝にも名前をつけて美を見出し、海外ではナイアガラのような巨大な滝に自然の力を見る。同じ「壁を流れる水」でも、何を読み取るかは文化によって異なる。



富士河口湖紅葉まつり

毎年11月、河口湖北岸で開催される秋の恒例行事。2025年で第27回を迎えた。湖畔に並ぶ約400～500本のモミジが色づき、メイン会場の「もみじ回廊」では梨川沿いに巨木モミジが紅葉のトンネルをつくる。日没後はライトアップが行われ、富士山・湖面・紅葉が一枚の景色に重なる。

真栄田岬の琉球石灰岩

—琉球の海が育てた自然の壁

撮影地_真栄田岬 所在地_沖縄県恩納村

壁を削るのは雨だけではない。
海もまた壁を削る。

沖縄・恩納村の真栄田岬は、隆起したサンゴ礁でできた断崖だ。かつて海底でサンゴが何万年もかけて積み重なり、地殻変動で海面の上に押し上げられた。琉球石灰岩と呼ばれるこの岩は、もとが生き物の骨格だから硬さにムラがある。密なところは残り、粗いところから先に崩れる。

波がこの壁を毎日叩く。潮が満ちては引き、塩水が岩の隙間に入り込み、石灰岩を溶かしていく。風が表面を乾かし、塩の結晶が岩を割る。その繰り返しは数千年、数万年続いた結果、壁は均一な面ではなくなった。ある部分は塔のように尖って残り、ある部分は深くえぐれて空洞になり、ある部分は崩れて隙間になった。その隙間に風が土を運び、植物が根を張り、緑が岩壁を覆い始める。

下から見上げると、それがよくわかる。かつて一枚の壁だったものが、削られ方の違いによってまったく別々の形になっている。尖った岩の隣に丸い窪みがあり、むき出しの灰色の岩肌のすぐ横に濃い緑が張りついている。壁は壊れているのではない。壁が時間をかけて別のかたちに変わっている途中なのだ。均一な壁は人工物にしか存在しない。自然の壁は常に不均一に削られ、そのムラが地形になり、地形が生き物の居場所になる。真栄田岬の琉球石灰岩は、壁が風景に変わっていく過程そのものを見せている。

島人ぬ壁

「壁」

緑の壁をゆく —フクギ並木と人が育てた天然の壁—

撮影地_フクギ並木 所在地_沖縄県本部町備瀬

自然の中に道をつくると、その両脇には壁が生まれる。ただし沖縄・備瀬のフクギ並木は順序が逆だ。人間が壁のほうを先につくった。

備瀬集落では約300年前から、台風を防風のために屋敷の周囲にフクギが植えられてきた。フクギは成長が遅いかわりに幹が硬く、葉が厚く、風を通さない。数千本のフクギが屋敷を囲み、それが連なって集落全体がひとつの緑の塊になった。遠くから見ると、そこに人が住んでいるとは思えない。

その緑の壁と壁のあいだに、細い小道が何本も走っている。高さ3メートルを超えるフクギが両脇にそびえ、頭上で枝葉が重なり合い、トンネルをつくる。歩く人間にとっては完全に壁だ。視界は前と後ろにしか開けない。だからこそ、並木の先に海が見えた瞬間の印象が強い。緑の壁に囲まれた道を抜けて、突然、青い海と白い砂浜が現れる。壁があるから、その先の開放が際立つ。

フクギは漢字で「福木」、福を呼ぶ木と書く。枯れた葉は金色になり、沖縄の言葉で「キンパー（金の葉）」と呼ばれる。台風から家を守るために植えた実用の壁が、300年を経て集落の風景そのものになった。壁の意味が、防御から風景へと変わった場所だ。

02 生活の

銀白の壁をゆく 一札幌の冬と人が育てた天然の壁

撮影地_北13条_所在地_北海道札幌市

北海道の冬、除雪された道路の両脇には雪の壁ができる。人が歩くために、車が走るために、除雪車が雪を左右に押しつけた結果として生まれた天然の壁だ。フクギ並木と同じく、人間が暮らしを守るためにつくった壁である。ただし決定的に違うことがひとつある。この壁は消える。雪が降るたびに壁は高くなる。除雪車が通るたびに壁は硬くなる。厳冬期には人の背丈を超え、道は壁と壁に挟まれた溝のようになる。フクギ並木の小道と構造は似ている。視界は前と後ろにしか開けず、壁の向こうは見えない。ただしフクギが20年かけてつくった壁を、雪はたった一晚でつくる。

そして春が来ると、壁は溶ける。数ヶ月かけて少しずつ痩せ、角が丸くなり、表面に土や砂利が浮き出し、ある日突然そこに壁があったことすら思い出せないほどに消える。フクギの壁が年々太く育つのは逆に、雪の壁は必ず消滅する。毎年ゼロからつくり直される壁だ。

しかも雪の壁は一日のうちでも形を変える。日中の気温で表面が溶け、夜に凍って硬くなる。風が吹けば上部が削れ、新たに雪が降れば輪郭が変わる。同じ壁は二度と存在しない。昨日の壁と今日の壁は同じ場所にあっても別のものだ。

それでも人はこの壁を毎年つくる。つくらなければ道が埋まり、家から出られなくなるからだ。過酷な環境で暮らし続けるために、消えたとわかっていても壁を何度でも積み上げる。雪の壁は、人間が自然と交わす終わりのない交渉の痕跡なのである。

03

情報をみせる壁

― 平面で伝える、見せる、並べる

壁は平面である。そして平面は、人間が情報を整理するためにもっとも頼ってきた形だ。

紅葉の並木は自然の美しさを一列に並べて見せるための壁であり、屋敷の壁に飾られた皿のコレクションは持ち主の審美を一面に並べた展示であり、壁に掛けられた時計は時間という見えない情報を目の高さに固定する装置だ。ポスター、看板、ショーウィンドウ。街を歩けば壁という平面はあらゆる情報を人間の視界に差し出している。そしてその延長線上に、ディスプレイがある。技術の進歩によって、壁は文字も映像も光も表示できる面になった。壁そのものは変わっていないのに、伝えられる情報の量と速度だけが変わり続けている。人間は昔も今も、何かを伝えたいとき、まず壁を探している。



自然を観るための壁

観る：美しい眺めや自然の表情を能動的に意識し、深く観察・堪能すること。

撮影地_河口湖もみじ回廊 所在地_山梨県南都留郡





広告を見せるための壁

見せる：その物や様子を人に示して、見るように、または見えるように仕向ける。

撮影地_明洞 所在地_大韓民国ソウル特別市

計算された

商売の「壁」

光の街をゆく —設計された明洞の看板

撮影地_明洞 所在地_大韓民国ソウル特別市

路面店の看板が左右から突き出し、上下に重なり、通りの両側から視界を埋め尽くす。ブランドのロゴが壁一面に拡大され、ネオンライトが店名を夜の空気に浮かび上がらせる。「E」や「B」が商品の映像を繰り返して流し、隣の店はそれより大きなディスプレイで対抗する。壁と壁のあいだの狭い通りを歩く人間は、常にごくこの店の壁に見られている。

ここでの壁の役割は明確だ。立ち止まらせること。店に入らせること。そのために看板は大きく、明るく、動く。文字は読ませるためではなく、目に飛び込ませるためにデザインされている。色の組み合わせ、フォントの太さ、光の点滅。すべてが一瞬で情報を届けるために計算されている。

明洞の壁は、建物の構造としての壁をほぼ完全に覆い隠している。本来の壁はコンクリートやレンガで、看板の裏側に消え、通りに面した面はすべてが広告になっている。壁が建物の一部であることをやめ、商売のための面として独立している。建物がそこにあるから壁があるのではなく、人が通るから壁がある。

緑の道で出会う

撮影地_フクギ並木 所在地_沖縄県本部町備瀬

備瀬のフクギ並木を歩いていると、緑のトンネルの中に突然、青い壁が現れる。コンクリートブロックを水色に塗った小さな建物。「貝の店」――もずく。「美ら海潜水クルーズ」。手書きの看板がばらばらの大きさに壁に掛かっている。

明洞の看板は、人が歩く場所と速度と視線を計算した上で設置されている。見る側の行動を予測し、壁の側から人間に向かっていく。フクギ並木の貝の店はそうではない。並木道を歩いていた人がまたまた、その角を曲がり、またまたこの青に出会う。壁が人を選んでいないし、人も壁を探していない。

看板は揃っていない。書いた時期も違えばペンキの色も違う。必要なことができたときにそのつど一枚足した結果がこの壁だ。明洞の壁が全体を一度に設計するのに対して、この壁は時間の中で偶然に積み重なっている。

計算された壁は、見る人間の行動を先に想定する。偶然の壁は、見る人間がいるかどうかすら想定しない。どちらも商売のための壁だが、壁と人間の出会い方の構造がまったく違う。計算と偶然。その差は看板の大きさや光り方ではなく、壁が人間をどこまで前提にしているかにある。

偶然に出会う

アートに魅せられる壁

魅せられる：不思議な力によって、心がひきつけられること。





撮影地_水原華城 所在地_大韓民国京畿道水原市



撮影地_モカ冊房壁画 所在地_大韓民国ソウル特別区城東区

壁画が生む壁への付加価値

壁はただ立っているだけで、すでにキャンバスになる。誰かがそこに絵を描いた瞬間、建物の外壁はもう単なる構造物ではない。路地裏のコンクリートの壁に人物が描かれ、文字が添えられる。通りすがりの人が足を止め、写真を撮る。壁が作品になる。

バンクシーは、その構造をもっとも鋭く利用した人間だろう。彼が描くのは美術館の白い壁ではない。パレスチナの分離壁、ロンドンの廃ビル、ブリス托ルの住宅街の外壁。壁の持つ文脈―政治、貧困、監視、戦争―をそのまま作品の一部にする。壁に描くのではなく、壁ごと作品にする。そして翌朝、何でもなかった壁の前に人だかりができる。建物のオーナーが壁ごと切り出して売ろうとする。落書きだったものが数億円の価値を持つ。壁は変わっていない。壁に与えられた意味だけが変った。

そしてその壁がドラマや映画のロケ地に選ばれると、もう一段階変わる。壁画そのものの価値に、物語の記憶が重なる。あのシーンで主人公が立っていた壁。ファンがその場所を訪れ、同じ角度で写真を撮る。壁は背景から目的地になる。

もとはただの壁だった。誰かが絵を描いて作品になった。誰かがカメラを向けて舞台になった。誰かが訪れて名所になった。壁自体は何も変わっていない。変わったのは、壁に重ねられた人間の行為の層だ。こうして芸術に魅せられる壁が完成する。



水原華城

水原華城（スウォンファソン）—— 韓国・京畿道水原市。1794年、李氏朝鮮第22代国王・正祖が父の墓を守るために築いた全長5.7kmの城塞。実学者・丁若鏞の設計により東西の建築技術を融合。1997年ユネスコ世界文化遺産登録。

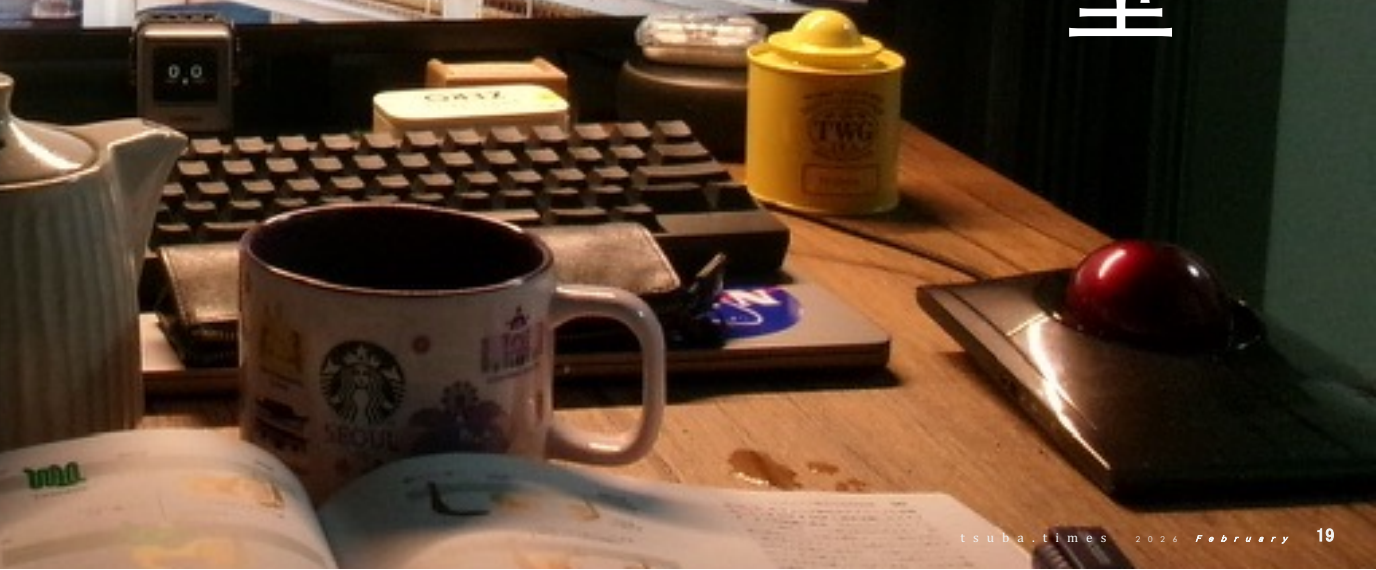
壁に囲まれた箱庭 で魅せられる

撮影地 食政美観地区 所在地 岡山県食政市

庭画は壁の表面を芸術に変える。しかし芸術が宿るのは壁の面だけでは
ない。壁に囲まれた空間の中にもそれはある。
水の塀と石灯籠に囲まれた小さな庭。その片隅の水鉢のふちに、眼鏡を
かけた猫が本を読み、もう一匹が釣り糸を垂れている。手のひらに収ま
るほどの置物の置物だ。壁画のように通るから見えないわけではない。塀
の内側に入り、庭に足を踏み入れ、水鉢のそばまで来て初めて気づく。
塀が空間を囲うことで、外の街路から切り離された小さな世界ができる。
その中に置かれたものは、どれほど小さくても主役になれる。壁画が
庭の大きさを使って人の足を止めるのに対して、箱庭の芸術は壁の囲い
に使って人の視線を近づけさせる。大きさが感動を決めるのではない。
近づける距離感が、ものの見え方を変えている。

箱庭の美学

情報を見るための壁



デジタルとリアルの接合点 —モニターと生活

撮影地_慶應義塾大学湘南藤沢 所在地_神奈川県藤沢市

どこにでもある壁、どこでもない壁——モニターとリアルタイムの世界。パソコンのモニターは、情報を見るために必ず必要な壁だ。

画面の向こうでは、ニューヨークの交差点が映り、東京の渋谷が映り、ソウルの明洞が映っている。ライブカメラが都市の街並みをリアルタイムで配信し、自分の部屋にいながら地球の裏側の今を見ることが出来る。雨が降り始めた瞬間、信号が変わる瞬間、人が傘を開く瞬間。それは録画ではなく、今この瞬間に起きていることだ。

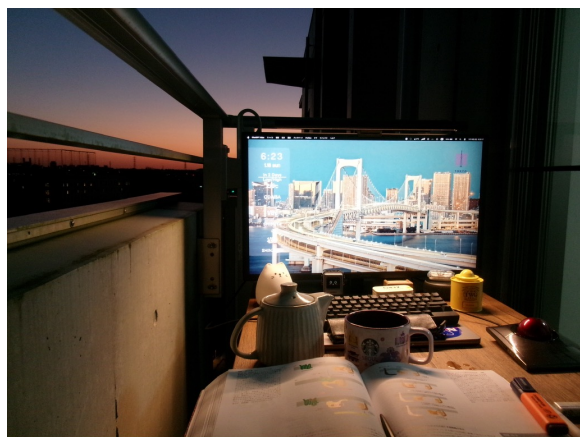
モニターという壁の前に座っている自分は、物理的にはひとつの場所にいる。しかし目の前の壁が映し出す世界は、どこにでもある。リアルの世界とデジタルの世界が同時に進行し、技術がその両方を一枚の壁の上で重ねている。かつて壁は「ここ」と「そこ」を隔てるものだった。モニターという壁は、「ここ」にいながら「そこ」を見せる。隔てるはずの壁が、繋ぐ壁になった。

そしてこの壁は場所を選ばない。カフェでも、電車の中でも、ベッドの上でも、モニターさえあれば世界の同時性に参加できる。壁がどこにでも持ち運べるようになったとき、壁と場所の関係そのものが変わった。



デジタルの

「壁」



朝3時から外で勉強した日のvlogより

1月某日、前日にノリで企画して行った。びっくりするくらい外は寒かった。

パソコンのモニターを見ている。デスクトップにはフォルダが並んでいる。書類、写真、プロジェクト、音楽。すべてが一枚の平面の上に配置されている。背景には壁紙、隅には時計が時刻を示し、ウィジェットが天気を伝えている。

モニターは情報を映す道具だと思われている。しかし見方を変えれば、これは壁だ。垂直に立った一枚の面に、持ち主が必要なものを自分の判断で並べている。フォルダの位置を変え、不要なものをゴミ箱に入れ、よく使うものを手前に置く。壁紙を季節ごとに変える人もいれば、何年も同じままの人もいる。情報を整理するにはまず平面が必要で、モニターはその面を提供している。

この壁はリアルタイムで世界にも繋がることができる。ライブカメラを開けば地球の裏側の都市が今この瞬間に動いている。カフェでも電車の中でもベッドの上でも、開けばそこに自分の壁が現れる。ただ、かつて自分が訪れた場所のライブカメラを開いたとき、不思議な感情が生まれる。あの通りを人が歩いている。あの交差点の信号が変わっている。楽しかった記憶の場所が自分抜きで動き続けている。モニターは世界を見せてくれるが、そこに自分がないという距離も見せてしまう。

そしてこの壁は映画や芸術を鑑賞する面にもなる。かつて映画は映画館で、芸術は美術館でしか見られなかった。モニターはその壁を自分の手元に持ってきた。一枚の壁が、情報の整理棚であり、世界への窓であり、芸術の鑑賞面でもある。中身がデジタルに変わったただで、壁に何かを並べ、壁を通して何かを見ようという行為は、人類がずっとやってきたことと変わらない。

物理的な並べる

壁に取り付けられた三段の棚を見る。丸いチーズがいくつも並び、花柄の絵皿が立てかけられ、パンが籠に入っている。キャンドル、マグカップ、小さな人形、造花。用途も出自も素材も違うものが、ひとつの壁面に沿って並んでいる。

これはどういう行為か。持ち主は自分が好きなもの、見せたいもの、手元に置いておきたいものを選び、棚の上に配置した。大きなチーズを中央に、小さな小物を端に。絵皿を立てて柄が見えるようにし、花を添えてバランスを整える。何をどこに置くか、何を隣り合わせにするか。その判断の積み重ねが、棚という壁面の上に現れている。

壁に物を並べることは世界中どこでも行われている。ヨーロッパの家庭では皿や銅鍋を壁に飾り、日本の家では掛け軸や花を床の間に配し、沖縄の民家ではシーサーを門柱の上に置く。やり方は違いが構造は同じだ。垂直の面に沿って、自分にとって大切なものを人の目線の高さに並べる。ここでモニターのデスクトップを思い出す。フォルダを並べ、壁紙を選び、ウィジェットを配置する。あれもまた、一枚の垂直な面の上に自分が必要なものを並べる行為だった。棚の上のチーズと皿の位置を入れ替えるのと、フォルダをドラッグして場所を変えるのと、手を動かす先が物理か画面かの違いだけで、やっていることはほぼ同じだ。

共通しているのは、どちらも壁という平面がなければ成立しないということだ。人間は情報でもモノでも、立体的に散らばった状態では全体を把握しにくい。一枚の面の上に並べて初めて、何がどこにあるかを一目で見渡せる。壁は空間を仕切るためだけにあるのではない。並べるための面として、人間の認知を助けている。

そしてどちらの壁にも、並べた人間が現れる。何を選び、何を捨て、何を隣り合わせにしたか。デスクトップがフォルダで埋まっている人と、最小限しか置かない人がいるように、棚の上を隙間なく埋める人と、余白を残して飾る人がいる。壁そのものには個性がない。しかし並べられたものの配置に、その人の思考と美意識が浮かび上がる。デジタルであれフィジカルであれ、並べるという行為を通じて壁は持ち主の鏡になる。

—上海・徐匯区

1849年に設置されたフランス租界は1914年の大拡張を経てこの一帯に広がり、上海で最も洗練された住宅街となった。通りにはプラタナスが植えられ、木漏れ日が白い漆喰やクリーム色の壁面に影を落とす。武康路を歩けば、フランス風、スペイン風、イギリス田園風と様式の異なる老房子が次々に現れるが、どの壁も庭の緑や蔭に半ば隠れ、通りから少し奥まった位置に静かに立っている。思南路ではレンガ造りの老房子の軒先に洗濯物が干され、子どもが走り回る。この壁は博物館の展示物ではない。百年前に塗られた漆喰の上に、いまでも誰かの生活が重なり続けている。

03

暮らしを映す壁

その街の暮らしを壁から想像する

世界各地の街には、それぞれ異なる壁がある。石積み、レンガ、コンクリート、漆喰、木板、タイル。素材が違い、色が違い、古び方が違う。その違いがそのまま街の雰囲気をつくっている。壁の素材はその土地で手に入るものを反映し、壁の厚さは気候を反映し、壁の装飾はそこに暮らす人々の美意識を反映する。通りを歩く人間が最初に目にするのは屋根でも基礎でもなく、壁だ。

街を知りたければ、壁を見ればいい。

撮影地_上海のある交差点 所在地_中華人民共和国上海市徐匯区復興西路周辺

上海

徐匯区の壁が生活に溶け込んでいるのに対し、黄浦江沿いの外灘に並ぶ壁は明確に「見られること」を意識している。1842年のアヘン戦争後、南京条約によって租界地となったこの通りには、各国の銀行や領事館が競うように自国の威信を壁面に刻んだ。ゴシック、ネオバロック、ネオルネサンス、アールデコ。約1・1キロメートルに連なる52棟の建築はすべて意匠が異なるが、どの壁も重厚な石とレンガで造られ、柱やアーチの装飾で通りに向かって存在を主張している。徐匯区の壁が葛や木陰に隠れるのとは対照的に、ここでは壁そのものが建物の顔だ。川を挟んだ対岸の浦東新区には、ガラスのカーテンウォールで覆われた超高層ビル群がそびえる。石の壁とガラスの壁。外灘に立てば、上海という都市の百年がそのまま左右の視界に収まる。



沖縄



—やむちんの里

読谷村の山あいには、19の工房が集まる焼き物の里がある。里の中央にそびえるのは、赤瓦の屋根と石積みの壁で覆われた全長25メートルの登り窯だ。1972年、那覇の壺屋で煙の問題を抱えた人間国宝・金城次郎がこの地に窯を移したのが始まりで、その後多くの陶工が続いた。登り窯の壁は傾斜に沿って積まれた石と土でできており、内側では1250度の炎が3日間絶えることなく燃え続ける。薪の灰が釉薬と溶け合い、壁の内側で器が生まれる。窯の壁は炎を閉じ込めるためにだけに存在している。工房の軒先には焼き上がったやちむんが並び、ぼつてりとした厚みと素朴な絵付けが沖縄の土の色をそのまま映す。車で10分ほどの場所には、15世紀に築かれた座喜味城跡の石積みの城壁が残る。

撮影地_北釜 所在地_沖縄県中頭郡読谷村座喜味



撮影地_やむちんの里のねこ 所在地_沖縄県中頭郡読谷村座喜味



やむちんの里

読谷村の山あいに入ると、赤瓦の屋根と石積みみの壁がぼつぼつと現れる。やちむんの里だ。19の工房が点在するこの一帯は、1972年に人間国宝の金城次郎が那覇の壺屋から窯を移したことに始まる。里の中央には赤瓦を載せた全長25メートルの登り窯がそびえ、その壁は石と土を積み上げただけの素朴なつくりだが、内側では年に数回、1250度の炎が3日間燃え続ける。工房の軒先にはぼつとりとした厚みのやちむんが並び、沖縄の土の色がそのまま器になったような素朴さがある。



読谷山焼とネコ

やちむんの里には猫が多く住みついていて、工房の軒先や登り窯のそばで寝転がり、石畳の道をゆっくり横切る。訪れた人が口を揃えて言うのは「猫がたくさんいる」ということで、器を見に来たはずがいつの間にか猫の写真ばかり撮っていた、という話も珍しくない。陶工たちの作業場のそばで、猫たちは焼き物と同じくらいのんびりとこの里に馴染んでいる



手洗所・TOILET

撮影地 やまの里 所在地 鹿児島県中頭郡読谷村座喜味

北京



04

誰のための壁か 古の暮らしを壁から想像する

一 故宮

南北961メートル、東西753メートル。高さ10メートルの赤い城壁と幅2メートルの水堀に囲まれた紫禁城は、1420年の落成以来、明から清までの24代の皇帝だけのために存在した空間だった。敷地面積72万平方メートルに70余りの宮殿、900を超えてる部屋。

しかし、この広大な城を訪れた者がまず気づくのは、ほとんどの建物の中に入れないという事実だ。太和殿の玉座は入口の柵越しに覗くしかなく、后妃たちの寢殿も窓の外から暗い室内を目で追うだけで終わる。つまり観光客にとつての故宮とは、赤い壁と黄色い琉璃瓦の屋根を延々と眺めながら歩く、巨大な迷路にほかならない。

門をくぐれば次の壁、角を曲がればまた壁。かつて皇帝を外界から隔てていた壁は、いま訪れる者を建物の内側から隔てる壁になった。主は変わったが、壁の機能は変わっていない。誰かを拒むためにある壁が、これほど美しいという矛盾。

故宮の壁は、壁とは何のために存在するのかという問いそのものだ。

水原



05

役割を変える壁

一八達門

水原華城は1794年から1796年にかけて、朝鮮第22代国王「正祖」が父「思悼世子」の墓を守るために築いた城だ。全長5・7キロメートルの城壁には、砲台や見張り台が配置され、銃眼が穿たれ、敵を拒むためのあらゆる仕掛けが施された。壁の内側には王の理想都市があり、壁の外側は脅威だった。

ところが、八達門の前に立つと見える風景はまるで違う。南門であるこの門は、タリートの戦い中に取り残され、周囲を車がひっきりなしに通り抜けている。門に近づくことすらできない。かつて城内と城外を分けていた門が、いまは交通の邪魔になっている。城壁の上はどうか。銃眼が並ぶ胸壁のすぐ横を、散歩する市民や写真を撮る観光客が歩いている。兵士が敵を監視した場所が遊歩道になり、事件指揮所の跡では観光客が弓を射る体験をしている。城壁の内側にはカフェや商店街が並び、買い物帰りのおばあちゃんやバスに乗り込んでいる。故宮の壁が「拒む」機能を持っていたのとは対照的に、水原華城の壁はその機能を完全に失った。しかし壁そのものは残っている。敵を拒んでいた壁の上を、いま誰もが自由に歩いている。

壁の意味が変わるとはこういうことだ。

撮影地_万春亭から望む北京故宮(紫禁城) 所在地_中華人民共和国北京市東城区



倉敷

—美観地区

倉敷という地名は、この土地に由来する。室町以前の一帯はまた瀬戸内海の多島地であったが、戦国時代から干拓（かんくわ）が進み田畑がひろがれ米どころとなり、江戸時代に川は運河として機能し「白根」の産物と倉敷代官屋敷が増えた。倉敷物流の拠点となった。「白根」という名も、米蔵を建てる並ぶその壁は白い漆喰で塗り固められた。平野を彩るためのもので、防火のためにも通風設備だった。白壁は美しいだけでなく、雨や雪の中に取り囲まれるものだから守るためにある。暗いところでも明るく照らすものだった。

明治に入ると繊維産業が興り、1889年に倉敷紡績所が建設された。赤坂三郎、総一郎父子を中心とした町並みの保存運動が始まり土蔵を改装して倉敷民芸館や倉敷老舗が開かれた。1960年に倉敷市の中心となる美観地区に指定。1975年には重要伝統的建造物群保存地区に選定され、現在まで大切に守られてきた。

撮影地_倉敷美観地区一所在(左) 倉敷市

36 tsuba.times 2024 February

—美観地区

倉敷という地名は、古く「蔵敷」とも呼ばれ、つまり年貢米や物資を蓄積して置く蔵屋敷の土地に由来する。室町以前この一帯はまだ瀬戸内海の多島地であったが、戦国時代から干拓（かんくわ）が進み田畑がひろがれた。米どころとなり、1949年に江戸幕府の天領（てんりょう）倉敷地にはじまる倉敷代官屋敷が置かれた。倉敷川は運河として機能し、江戸中下流で米や綿花・塩・砂糖が集まる物流の拠点となった。江戸時代中期から米蔵を建てる並ぶ。その壁は白い漆喰（しっくい）で塗り固められた。土間に石を敷き詰め、防火のための土間瓦葺（どまなわぎ）地を漆喰で舗装した。白壁は美しいだけでなく、雨風にさらされず、火災を防ぐ役割を果たすためである。

明治に入ると繊維産業が興り、1889年に倉敷紡績所が建設された。赤坂三郎、総一郎父子を中心とした町並みの保存運動が始まり、土蔵を改装して倉敷民芸館や倉敷老舗館が開かれた。1960年に倉敷市の中心となる美観地区に指定。1975年には重要伝統的建造物群保存地区に選定された。

撮影地_倉敷美観地区（所在地：岡山県倉敷市）

36 tsuba.times 2024 February

白壁のある暮らし、

撮影地_倉敷美観地区 所在地_岡山県倉敷市

白壁から見える暮らし

いま倉敷川沿いを歩くと、白壁の蔵はカフェになり、雑貨店になり、旅館になり、美術館になつている。米を守っていた壁が、観光客を迎え入れる壁に変わった。築360年の米蔵に泊まれる旅館があり、砂糖問屋の蔵でコーヒーが飲める。江戸時代の蔵が倉敷民芸館として柳宗悦の民藝思想を伝え、大原家の屋敷が重要文化財として公開されている。壁の素材も構造も変わっていない。漆喰となまこ壁はそのままだ。変わったのは壁が囲んでいる中身である。米俵が消え、代わりに人が入った。物資を外から守る壁が、人の中へ招き入れる壁になった。倉敷川を進む舟も、かつては物資を運んでいたが、いまは観光客を乗せて白壁の風景を見せている。壁の役割が「守る」から「見せる」に変わったとき、倉敷の白壁は実用から風景になった。

撮影地_倉敷美観地区 所在地_岡山県倉敷市

06

戦略としての壁

北京市街から北へ約70キロ、怀柔区の燕山山脈に慕田峪長城がある。起源は南北朝時代の北齊（550～577年）にまで遡り、明代に入ると太祖・朱元璋の命を受けた徐達が北齊の長城跡に新たな城壁を築き、1404年に慕田峪関と名づけられた。その後も北方騎馬民族の脅威が続くかぎり壁は強化され続けた。この長城の最大の特徴は、城壁の両面に銃眼が設けられていることだ。通常の長城では外壁側にしか狭間がない。慕田峪では内側にもある。明代の名将・戚継光が、敵が壁を越えて侵入した場合に背後から撃つために設計したとされる。壁の外だけでなく内側にも敵になりうるという想定。壁一枚を挟んで、どちらの方向にも殺傷する準備ができていた。

いまその壁の上には、ロープウェイで上がった観光客が歩いている。八達嶺より人が少ないという理由でここを選んだ旅行者たちが、両面の銃眼を覗き込んで写真を撮る。帰りはスライダーで山を滑り降りる。周囲の90パーセントは松や柏に覆われ、秋には紅葉が城壁を染める。かつて360度すべてが戦場だった壁の上がいま最も静かに風景を楽しむ場所になっている。どこから敵が来ても対応できるように設計された銃眼が、どの方向を見ても美しい山並みが見える展望窓に変わった。

慕田峪

摄影地_慕田峪长城 所在地_中华人民共和国北京市怀柔区渤海镇慕田峪村



撮影地_スシロー 所在地_茨城県つくば市



慕田峪長城

慕田峪長城は北京市怀柔区に位置し、北斉時代に建造されたのち明代の1404年に関として整備された全長約5400mの城壁で、城壁の内外両面に銃眼を持つ構造は万里の長城全体でもここだけの特徴である。1987年に世界遺産「万里の長城」の構成資産として登録された。

人間が開発した戦略的な壁

壁に埋め込まれたディスプレイや電光掲示板は、街のいたるところにある。駅の通路、ビルの外壁、商業施設のエントランス。それらは自社の製品やサービス、食べ物や番組を通りすがりの人に伝えるために設置されている。かつて壁に情報を載せるには、紙を貼るか、文字を書くか、看板を掛けるしかなかった。内容を変えるには貼り替えるしかなく、夜になれば見えなくなった。ディスプレイはその制約を取り払った。一枚の壁の上で内容が数秒ごとに切り替わり、動き、光り、音を出す。昼も夜も関係ない。壁の面積は変わらないのに、そこに載せられる情報の量は事実上無限になった。

これはテクノロジーが壁に与えた新しい役割だ。壁はもともと空間を仕切るためのものだった。そこに人間は時計を掛け、皿を飾り、ポスターを貼って、情報を伝える面として使い始めた。ディスプレイはその延長にあるが、目的がひとつはつきりしている。見た人に何かを買わせたい、選ばせたい、覚えさせたい。広告のために生まれた壁だ。

街を歩いていて目に入る光る面のほとんどは、誰かが誰かに何かを売ろうとしている壁である。

動物の戦略と「壁」



都市において壁は人間だけのものではない。ヤモリは夜の壁面を歩き、鳶は目地を見つけて壁をよじ登り、鳩は壁のくぼみに巣をつくる。人間が壁で囲った空間の隙間に、別の生き物たちが自分の居場所を見つけている。彼らは壁を壊しもしないし、修繕もしない。ただ壁があるという事実を、人間とはまったく違う仕方を利用して。都市における人間と生き物の共存とは、共に暮らすという美しい話ではなく、同じ構造物をまるで別の意味で使っているという、すれ違いの上に成り立っている。壁はそのすれ違いが最も見えやすい場所だ。





07

形なき精神的な壁

撮影地_?? 所在地_新潟県



撮影地_北釜 所在地_沖縄県中頭郡読谷村座喜味



特急いなほ号から見える北陸の海

見えない壁 各々の心のフレーム

この写真には壁が写っていない。岩場があり、砂浜があり、海沿いの道路がカーブしている。ただそれだけだ。しかしこの写真を見たとき、ある人はかつての夏を思い出す。車の窓から見た海、部活の合宿で走った砂浜、好きだった人と歩いた防波堤。別の人にとっては単なる国道の風景であり、また別の人にとっては地質学的に興味深い海食崖かもしれない。風景は同じだ。光も波も岩の形も変わらない。変わっているのは、見ている側の目だ。

人間は風景をそのまま見ることができない。必ず自分の記憶と経験で切り取る。カメラのファインダーのように、無意識のうちに「ここからここまでが美しい」「ここに意味がある」という枠を設定している。その枠の外側は見えていても見えていない。これは物理的な壁でも制度的な壁でもなく、知覚の壁だ。目に入る情報は同じなのに、何を風景として受け取るかは人によってまったく違う。自分では壁があることにすら気づかない。

この雑誌ではここまで、石の壁、レンガの壁、漆喰の壁、コンクリートの壁を見てきた。敵を拒む壁、商売を守る壁、美しく見せるための壁、役割を変えた壁。それらはすべて物理的に存在し、触れることができ、写真に写る。しかし最も強固な壁は写真に写らない。あなたがいま、この一枚の海岸の写真に何を見たか。それがあなたの壁だ。同じ世界を見ていながら、誰もが違う風景の中に立っている。壁は外にあるのではない。最初から、目の中にある。



自然の祭壇

撮影地_フクギ並木 所在地_沖縄県本部町備瀬

風景を映す

水面の上と下——ふたつの世界を隔てるもの

この写真は上下が逆さまになっている。しかしそれに気づくまでに少し時間がかかる。白い建物が立ち、冬枯れの木々が枝を伸ばし、青空が広がっている。どちらが現実でどちらが反射なのか、一瞬わからなくなる。水面がどこにあるのかを見失ったとき、一枚の写真の中に二つの世界が等しく存在し始める。

上橋菜穂子の『精霊の守り人』では、人間が暮らすサグと精霊が棲むナユクという二つの世界が同じ場所に重なって存在している。ナユクは目には見えないが、水の流れや大地の奥に確かにある。水はその二つの世界が最も近づく場所として描かれる。水の淵は精霊の命であり、水底は人間の世界と精霊の世界が触れ合う境界だった。水面とは、つまり二つの世界を隔てる壁である。

岡山の運動公園の池に映るこの白い建物も、同じ構造を持っている。水面の上には人間が建てた建物がある。水面の下にも同じ建物がある。しかし水面の下に建物は誰も住んでいない。触れることもできない。手を伸ばせば像は崩れる。水面は通り抜けられない壁として、実在の世界とその影の世界を分けている。石の壁のように硬くはない。しかし水面の向こうに行くことは、石の壁を越えることよりもずっと難しい。なぜなら水面の向こう側には、そもそも行くべき場所が存在しないからだ。映っているのに、見えていない。触れられない。水面とはそういう壁である。物理的にはほとんど何もないのに、二つの世界を完全に断絶させている。最も薄く、最も越えられない壁だ。

「壁」

撮影地_岡山運動公園 所在地_岡山県岡山市北区

魂を映す

この写真に壁はない。木々のあいだに大小のシーサーが並び、珊瑚の石や貝殻が積みまれ、草が絡みでいる。建築物としての壁はどこにもない。しかしこの場所に足を踏み入れたとき、何かの境界を越えた感覚がないだろうか。ここから先は別の領域だという言葉にならない気配。シーサーたちの目が、こちらを見ている。

鳥居は壁ではない。柱が二本と横木があるだけで、左右は素通しだ。物理的には何も遮っていない。しかし鳥居をくぐる瞬間、人は無意識に背筋を伸ばす。ここから先は神の領域だと身体が知っている。沖縄の集落の入り口に置かれたシーサーも同じだ。石の獅子が対峙するだけで、その内側は守られた空間になる。壁も柵もないのに、シーサーの存在が見えない結果を張っている。道端のお地藏さんもまた、あの世とこの世の境界に立つ存在として置かれている。石の像ひとつが、生者の世界と死者の世界を分けている。

これらは建築ではなく、信仰がつくった壁だ。石に魂を見る人にとっては、シーサーの前に確かに壁がある。信じない人にとっては、ただの石の置物が並んでいるだけだ。壁の有無が見る人の精神によって決まる。これはこの雑誌でこれまで見てきたどの壁とも違う。漆喰の壁は誰にとっても壁であり、城壁は誰にとっても城壁だ。しかし魂の壁は、信じる者にしか見えない。そしてその見えない壁こそが、何百年ものあいだ集落を守り、土地に暮らす人々と先祖をつないできた。先祖がこの石を置いた。その子がこの石を守った。その孫がまた新しい石を加えた。シーサーの表情がひとつひとつ違うのは、それぞれの時代に、それぞれの手で彫られたからだ。石の壁には土地の記憶が積み重なっている。物理的な壁が土地の気候と素材を反映するように、魂の壁はその土地に生きた人々の祈りを反映している。

鏡としての

